

## 国際幼児教育学会への参加

名古屋国立大学大学院人間文化研究所 山田 美香

・国立台北教育大学附属  
実験国民小学附設幼稚園

二〇一七年九月一日から九月二日、国立台北教育大学で行われた第三八回国際幼児教育学会に参加した。国際幼児教育学会は、日本で設立され、主に日本人が学会に参加しており、関連する海外の幼児教育を論じることが中心の学会である。今回私が参加したのは、これまで台湾の幼児教育を研究し、何園も幼稚園（幼稚園）を訪問した経験があったこと、そのうえで、新しい台湾の幼稚園に関する情報を得たいという背景があったためである。台湾と日本の幼児教育の違いは、日本より早く台湾の方が制度改革を行っていることである。一つ例を挙げれば、幼保一元化、幼稚園評価、五歳児の授業料無償化など、幼稚園の質を保障するため努力がなされた。現在のところ、日本においても、幼稚園・保育園などに通う幼児の授業料（保育料）は、無償化する方向に制度が変換しつつある。台湾では、幼稚園の

年長・小・中・高が国民教育と考えられ、五歳児クラスは国民教育の一部との理解もある。授業料が無償であるゆえに、五歳児クラスは、ほぼ一〇〇％に近い就園率となっている。今回、国際幼児教育学会が開催された国立台北教育大学は、大学への昇格により国立台北師範学院から国立台北教育大学となっている。国立台北教育大学周辺部は、日本統治時代に設立された台湾大学など多くの教育機関がある。

学会参加一日目は、国立台北教育大学附属国民小学附設幼稚園に見学に行った。日本の場合、国立大学教員養成系学部附属幼稚園があるが、台湾は国民小学に幼稚園が附設されているため、上記のような名称である。国立台北教育大学教員から実質的な「大学附属幼稚園」であること、大学との連携があることで質が高い教育を行うことができると盛んに聞かされた。隣に大学附属国民小学もあり、国民小学の設備も含めて、大変広いスペースを使うことができるという。

まず幼稚園の教室を見た際、その広さに驚いたが、教室の広さに適した環境構成を行っているのか、ということに疑問を感じた。多くが昼寝のスペースや倉庫に使われており、実質的に保育に使う場所として十分にスペースを生かしていないように思えた。また、設定保育の時間に見学をしたが、一緒に参加したメンバーは、先生の指導力が強い教育であり、子ども中心の教育には見えないうと感想を述べた。二時間ほどの見学であったため、保育の中核理念について説明はあったが、理念に即した実態があったのかどうかは、正直分からなかった。特に、見学者が一見して、何が中心となる保育なのか、それを理解できなかったことは、「大学附属幼稚園」であったためだと思われる。私は、これまで、台湾では教育熱心な親が多く、積極的に国民小学附設幼稚園に子どもを就園させる親はあまりいないという理解をしていた。一〇数年前から台湾の幼児教育を研究したが、その時期は、国民小学附設幼稚園（当時）は私立幼稚園（当時）と違って、社会的に支援が必要な層を多く受け入れている。そのため、家庭で十分な教育を受けられない子どもが多く、教育熱心な親は国民小学附設幼稚園（当時）を敬遠する傾向があったと

聞いていた。しかし、最近はそのようにもなく、国立台北教育大学附属実験国民小学附設幼稚園には、近隣の豊かな層の子どもが多く通っているという。

見学中に、幼稚園の主任に、親が幼稚園に何を求めるのかを質問した主任は、子どもは幼稚園から帰ったあと、塾や教室などに行くので、幼稚園には知識を教えこむことを中心とした厳しい教育を望んでいないということ述べた。

台湾のような厳しい受験競争がある社会で、子どもにとって適した発達を尊重したいという親の希望とそれを支える幼稚園の理念は分かったが、その思いを保育の現場でどのように体现するのは難しい。台湾の幼児教育は、子どもが小学校に入ってから以降、子どもの学力が高いことを望み、幼児教育の時期に子どもらしく生きることに対しては前向きではない。公立の国民小学附設幼稚園とは違い、私立幼稚園の現状を見ると、私立幼稚園なりに多様な保育を展開し、その保育がいかに子どもの将来につながるのか、それがはっきりと示されていることだけは明らかである。その明確な幼稚園の方針は、実際の保育と重なって見える。この幼稚園の教育を受けると、こんな能力が身に付くなど、目に見える形で親

に知らせることが多い。ただし、公立国民小学附設幼稚園の場合は、国民小学、国民中学というように、時を経て子どもが自分らしく生きていくために必要な最低限の教育を行っているように思える。私立園の分かりやすい方針に対して、公立園ゆえの教育の重要性を訴えることが少なかったため、これまでは、公立園の評価があまり高くなかったといえる。

### ・子どもが作り出すものを

#### どのように尊重するのか

学会のなかで最も興味深かったのは、中国幼稚教育学会理事長翁麗芳先生が、幼児教育が教育学の中心にあること、人が育つうえで幼児教育が重要であることを徹底して訴えていたことであった。台湾の幼稚教育学会は歴史もあり、それに対する支援や研究の深みもあるという。台湾は、研究者・教師を含めて幼児教育を議論する雰囲気は長く続いたといえる。

このような環境のなかで、先生が与える幼児教育から、子どもが自分で考えたことを作り上げることが支える幼児教育へと方向転換がなされている。これまでのように、幼稚園で、国民小学で必要な知識を教えることを重視することから、子どもの

姿をみて援助をすることを中心に考えるようになっていく。それゆえに、子どもが学びたいことを支え、そこから子どもがさらに学んでいく様子を一歩ずつ一緒に歩んでいくことが推奨されているように思えた。

幼稚園の制作について、服装を取り上げた園の紹介がとも面白かった（唐富美・哈曉如「四季芸術幼稚園における創意プロジェクト授業——「服装ドリーマー——」」。服を人形に着せてみることから、さらに自分たちで着る立体的な服を作る様子の紹介があり、子どもの服に対する関心がどこにあるのかがよく分かった。子どもは、徐々に、着たい服、おもしろい服、ファッション性を備えた服などを作り出していった。先生は、そのために必要な教具、道具などを備え、子どもの話し合いに耳を傾けていた。先生の姿は、モノづくりの原点とは何か、子どもはモノづくりにより何を発見するのかを理解し、そのうえで、子どもの関心が服作りという表現につながるような関わりをもつものであった。服作りのなかで、子どもは工夫をするが失敗し、その失敗のなかで新しい手を打つ。さらに、それが失敗しても、新しいことを考えることを繰り返していた。まじめに作業に取り組みつつ、楽しみ喜んで新しいことを行おうと

する子どもの状況は、何をきっかけに子どもが懸命に進んでいこうとするのかがよく分かった。子どもは欲しい服を作ったら、次は別の服を作りたい、しかし同じ方法で作る服ではなく、さらにプラスアルファのものを作り出していく、それを繰り返していくのである。しばらくすると、子どもの服に対する学びの変化は考えられないほど大きなものとなった。子どもがこんなことをやってみたい、こんなことができた、ではその次はこんなことを試してみたい、など、服作りのプロセスにおいて子どもが何を思っているのかについても、丁寧な説明があった。

### ・台湾の多様性と幼児教育

学会のテーマが、「多文化社会における幼児教育―過去・現在・未来―」であったことから、多文化社会と幼児教育について議論がなされた。台湾では両親が働いていることもあって、幼稚園に、子どもの教育をすべて任すという風潮も強い。また、幼稚園が子どもに多くの知識や技術を与え、子どもが国民小学に入ったのち優秀な成績をとることを望む親も多い。親は子どもの将来に結びつく重要な場所だと幼稚園を考えているので、早い段階で子ども何を与え

たいのか、それによってどんな園を選ぶのかが違ってくる。台湾では幼稚園も多く、選択肢は多いのであるが、選択肢が多いほど親は悩むし、選択肢が少ない地域であれば地域全体で幼稚園の重要性を認識し、できる限りの保育を行う。

そのような受験一辺倒である台湾は、実は、多様性を認め合う国であり、それは理念的なものではなく、幼稚園のなかの子どもの背景も多様であり、その多様性に応じた教育が必要とされている。

台湾人の報告において、原住民（台湾では、先住民族のことを原住民と称している）や台湾新住民家庭の子どもに関わる議論があった。新住民家庭は、母親が外国籍で、父親が台湾籍の家庭をいう。新住民家庭において、子どもが母親の言葉を学ぶのは重要であると認識され、母親の母語を学ぶため教材、絵本の作成などについての話もあった（葉郁菁「台湾における移民家庭の子どものことばと社会発達について」。曾秀珠「台湾の幼稚園における多文化教育―新平市の多文化絵本の事例よりの経路」。この場合の母親は、台湾よりの経済力が低い国の出身で、台湾人男性と結婚をする女性が多かった。十数年前に、有賀克明先生（現在は名誉教授）、水野恵子先生（当時、

日本女子体育大学）と、新住民家庭が多い地区を見学したことがある。その当時でさえ、新住民家庭の子どもにとってどのような教育が必要なのか、それを考える姿勢が十分に見られた。五年ほど前、高雄市に短期滞在した際は、台湾のどの地域でも原住民や新住民家庭の子どもがいたことで、台湾の教育のあり方が変化していることを理解した。

幼稚園では、すでに、多様な背景を持った子どもが集まる社会が作られており、そのような状況から、今後さらに、原住民、新住民家庭の子どもについての研究を進められていくようである。原住民と新住民家庭に対する行政の関わりは増え、様々な支援がなされつつある。社会が多様な立場の人を抱える場合、どのような幼児教育を必要とするのであろうか。

しかし台湾には日本人をはじめ、多くの外国籍の子どもが住んでいるが、外国籍の子どもに対する幼児教育の議論の盛り上がりはほとんど見られない。私は、学会で「中国と台湾の日本人幼稚園」について発表した。日本人幼稚園には、中国人と日本人、台湾人と日本人の間に生まれた子どもも多く、そのような子どもに対しても、日本的な幼児教育（海外にいても、日本の幼稚園で行われ

る教育を中心とする）を行っていることを紹介した。台湾においては、台湾人と結婚した日本人の子どもについては、その子どもの教育保障について、特に施策が考えられるわけではなく、台湾で母親が社会的弱者であるとその施策の対象となる。

日本の場合、これまで、父親か母親が外国籍である子ども、また父親母親共に外国籍である子どもについて十分な保育実践もなく、日本人と同じ保育の環境が提供されてきた。

現在は、そのような子どもの存在が大きくなっていくが、それに対応できる人材がいいため、その子どもにとって必要な保育が実質的に重視されていない。父親・母親が外国籍であることに対して教育的な配慮をするより、むしろ子どもが日本で過ごすためには、日本語による保育が重要だと理解がなされたためである。台湾の新住民家庭の子どもに対する支援は、アジアのなかでは充実したものになりつつある。新住民家庭の存在が目立ち始めると同時に、社会的に、その子どもの教育についても関心を呼んだためである。

#### ・まとめ

台湾では、子ども自身が自分でやりたいことを見出していく、そのよ

うな教育が、子どもにとっても社会にとっても必要だという理解がなされつつある。幼児園は受験勉強を始めるところだという一般的な理解に対して、子どもがしたいことを援助する、そのような幼児教育に変化しているのであれば、台湾の教育にとって革命的な変化が現れたと言える。